

---

# 父の嘘

三滝 まどか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

父の嘘

### 【著者名】

Z94960

### 【作者名】

三滝 まどか

### 【あらすじ】

その時の気持ちを、その時に伝えられたらどんなにいいとか。

私の父は、よく嘘をついた。

例えば、幼稚園の遠足の前の夜。

天気予報では雨が降ると言つていて、愕然とした。

とても楽しみだったので、私は泣いてしまった。

「お父さんが雨を追い払つて、明日晴れにしてあげるよ

父のその一言が、私を元気にさせた。

私は本当に、純粋に父を信じたのだ。

結局、次の日は雨が降つて遠足は中止になつた。

私は泣きながら、嘘つきと言つた。

「ごめん、ごめん」

父はそう言つて笑つた。

これが、私の覚えている限りでは父が最初についた嘘だつた。

父はあまり怒ることがなかつた。

母さんがその分怒つてくれているんだよ、と言つていた。

母にそうなのかと尋ねたら、笑うだけだつた。

やつぱり父の嘘だつた。

成長するにつれ、私は父の嘘を真に受けなくなつた。

中学の時には、父の嘘が鬱陶しくなつた。

高校に入つて、父と会話することが減つた。

大学に進学せず就職することを決めた日は、父に何も相談しなかつた。

私と父の距離は段々離れていつた。

成人した私は、一人暮らしを始めた。

最初に一人暮らしをしたいと言つた時、父はとても反対した。

優しかつたはずの父に反対されたのが無性に悲しくて、

私は半ば強引に家を出た。

それでも父は、陰では私を応援してくれた。

一人暮らしを始めて3年後、私は職場の男性と結婚した。  
父と母は喜び、結婚式では初めて両親の涙を見た。

翌年に女の子が生まれ、

父は、もう思い残すことないと冗談交じりに言つていた。

何事もなく時は過ぎ、子供が5歳になつた秋だつた。  
家に電話をかけたら父が出た。

取り留めのない話をした。

私は、二人とも元氣でやつてゐるか尋ねた。

父はその頃、よく咳をしていた。

心配でそのことも尋ねたが、ただの風邪だと言つていた。  
母も、元気に今日も買い物に出かけたと言つていた。

それを聞いて安心した。

「お正月には家に帰るから。

その時に、お父さんに聞いてほしいことがあるの。  
また電話するね」

私はそう言つて電話を切つた。

それから一ヶ月後に、突然父が死んだ。

胃に悪性の腫瘍見つかっていて、先は長くなかつたらしい。

私が電話をかけた日に、余命半年と宣告されていた。

母だけは、そのことを知つていた。

父が私に話すことを拒んだのだと、後に父の主治医から聞いた。

私は泣きながら怒つた。

何故話してくれなかつたのか。

最後まで嘘をついて、私が心配しているのを知らなかつたのか。  
そんな私を母は叱つた。

父を怒つてはいけない、と。

分かつてる。

いつも父は、私や母を悲しませなによつて嘘をついていたこと。  
どんどん開いていく私との距離を、悲しんでいたこと。

私をとても大事に思つてくれた父の気持ちを、私は知つていた。  
最後の嘘は、私を心配せまことにした父の優しかった。  
ちゃんと分かつてる。

それなのに怒つたのは、私の言葉で父に伝えたい言葉があつたから。

病室の片づけをしていると、

父の机の引き出しに手紙が入つているのを母が見つけた。

「これはお父さんの、最後の嘘です。

今までたくさん嘘をついて悲しませたことは、すまないと思つています。

これからも、母さんのことをよろしく頼みます。

長く長く生きて、家族を大切に。

もつともつと、幸せになるよつ。

父よつ

私に宛てた手紙だった。

その夜、私は返事を書いた。

「ねえ、お父さん。

どうしても聞いてほしいことがあるの。

初めて私に嘘をついたとき、どんな気持ちだつた？

私が嘘つきつて言つたとき、どんな気持ちだつた？

あの子が生まれてから5年、あの時の私と同じ年になつたの。

私も、あの子に嘘をつくことがある。

そして、嘘つきつて言われることがある。

そんな時に、お父さんがなぜ私に嘘をついたか分かるの。

私の悲しい気持ちを、少しでも忘れさせようとしたのよね。

今までの嘘も、現実の厳しさや汚さに

私の気持ちが傷つかないように守ってくれていたのよね。

時々は、お父さんの都合もあつたけれど、

家族はいつも温かかったもの。

私も大人になって、親になってやつとわかった。

お父さんの優しさにやつと気づいた。

今までありがとうございました。

娘より

手紙の返事を、父の棺にそつと納めた。  
父の顔は昔より少し瘦せていたけれど、  
なんだか笑っているようだつた。

嘘だよと、起き上がつてくるのではないかと思えるほど  
いきいきとして見えた。

天国で、この手紙を読んでくれるだらう。  
ラブレターのように、封にはハートのマークを描いた。  
この意味を、きっとお父さんなら分かってくれる。  
とても優しい、家族思いのお父さんだから。

## (後書き)

このジャンルは何なんだ?と、今でもハテナが浮かんでいます。  
ずいぶんと昔に書いたもので、当時の気持ちがそのままぶつけられています。

物語、とも違つて……おれらへ、その当時は何も考えずに書いたのでしよう。

この中には、少し自分の後悔が含まれています。  
元気だと思っていた大切な人。

会えなかつた後悔は、今でもあります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9496o/>

---

父の嘘

2010年11月16日07時47分発行